

# 蒙古軍供養塔除幕式問題の再検討

——拙稿「高鍋日統と大陸山水城院」の補遺として——

藤岡 健太郎

はじめに

筆者は以前、『太宰府市史』通史編別編に、「高鍋日統と大陸山水城院」という小稿を書いたことがあった。これは現在の太宰府市（旧水城村）吉松に「大陸山水城院」という寺院を建立し、そこを拠点として活動した日蓮宗僧侶・高鍋日統の思想・行動について考察したものである。その中で、高鍋が中心となって建立された「蒙古軍供養塔」についても論じたのであるが、規模は小さいものの中間の外交上の懸案ともなった同塔除幕式に関しては、紙幅の関係もありあまり言及できず、また遺憾ながら調査が不十分であったことに気が付いた。同稿では結局、高鍋が残した史料を中心として簡単なまとめをしたに過ぎなかったが、その後外務省外交史料館に関係史料が若干存在することに気が付き、同稿では触れることができなかった、日本外務省の対応がある程度明らかとなった。

そこで本稿では、日本外務省側の動きを含めて、改めて蒙古軍供養塔の除幕式をめぐる問題を検討したい。前稿と重複する部分も多いが、前稿での検討の内容を含めて、この問題全体の再検討を試みるのが本稿の目的である。

## 一 蒙古軍供養塔除幕式に向けた動き

——カラチン王来日問題——

まず、蒙古軍供養塔の建立までの過程を簡単に見ておこう。この建立運動の中心となった高鍋日統は、一八七九年博多に生まれた日蓮宗僧侶である。若い頃から自らの大アジア主義思想の実践に努め、一九二四年に前述の水城院を、「大陸発展海外雄飛大亜信交の道場」として建立した。蒙古軍供養塔建立運動は遅くともその前年から開始している。二三年以降高鍋は福岡・勝立寺の新野正観と共に福岡市内の日蓮宗寺院や福岡県議会で演説し、建立の必要性を訴え、その計画を披露している。

高鍋らの運動の結果、多くの発起人・賛成人を集めることに成功した。その顔ぶれは日蓮宗関係者、中央・地元政財界の有力者、地元郷土史家、そして張作霖をはじめとした中国政府の有力者などである。またこうした人物などからの寄付により建立資金も賄われた。供養塔自体は二七年五月に落成している。

供養塔の完成から一年近いのち、一九二八年三月七日にその除幕式が行われることとなった。高鍋らは、この除幕式を「日蒙親善」の名の下に大々的に行うことを企図した。単に除幕式典を行うのみならず、

それ以外の様々な企画を實行することにより、一大国際イベントとすることを目論んだのである。

そしてとりわけ、これらのイベントの中心となる除幕式典には、それにふさわしい大物を招くことが企図された。それは当然、モンゴル人の実力者でなければならぬ。そこで白羽の矢が立ったのが、カラチン王コンサンノルフであった。

カラチン王コンサンノルフ(喀喇沁王貢桑諾爾布、Kung-Sang-né-ahpu)は、一八六五年生まれの内モンゴルの王族である。日本に留学経験があり、自ら設立した学校に日本人講師を招いたり、日本に留学生を派遣するなど、日本と関わりの深い人物であった。一九二二年、清朝の崩壊に際して起こった第一次滿蒙獨立運動では、川島浪速や義兄にあたる肅親王善耆と共にその中心となったが、翌年參議院設置とともにその議員となった。また同年設置された蒙藏事務局の總裁に就任し、一八年蒙藏院に改組されると引き続きその總裁に就任した。その後一時期を除き蒙藏院總裁の地位にあり続けている<sup>2)</sup>。蒙藏院とは、蒙古・西藏といった少数民族の統治を担当する部署であり、その總裁は、中国内のモンゴル人の中では最高の地位にある人物であった。こうしたところから、除幕式に主賓として招かれることになったのは当然であったと言えよう。

このカラチン王と高鍋らの最初の接点は不明だが、除幕式に関しては、今里準太郎代議士を通じて招待状を手交したのが最初のものである(時期不明)。その後、元在赤鋒領事であった北条太洋が北京でのカラチン王との交渉役となって訪日の準備が進められた。また高鍋らは、当時在北京日本公使館付武官であった本庄繁にも訪日を斡旋するよう依頼しており、一九二八年一月以降本庄はカラチン王らに会って、

除幕式参列の件を話している。

こうした北京での動きがある一方で、日本国内での動きはどうであったろうか。

日蓮宗宗務院は、一月二八日付で外務省に対し、対支文化事業部からカラチン王一行の交通費・滞在費等を援助するよう要請した。援助を要請する理由として日蓮宗宗務院は、カラチン王らの出席が「日支提携ノ文化運動ニ資」するものであることを挙げている。具体的にはカラチン王らを、除幕式のほか、「京都、大阪、横浜、東京等」で開催される「東亜親善ノ講演会、懇親会等」に出席させ、さらに「同時ニ兼ネテ内地視察等(往復滞在共約六週間)ヲ為サシメ」るとしている<sup>3)</sup>。

史料は残されていないが、要請を受けた外務省対支文化事業部では、在北京公使館に対しこの件を照会したものと思われる。のちの対応からすると、対支文化事業部としては援助に前向きであったのではないかと思われるが、出先ではこの計画への危惧が生じていた。二月二日付で在北京公使館から芳沢謙吉公使名で本省に送られた電信では、次のように現地事情を説明し、除幕式の延期などを勧告するように要請している。

供養塔除幕式ニ蒙藏院總裁其他ヲ招待スルハ全然宗教的動機ニ出テタルモノトスルモ目下支那側ニ於テハ我方ノ對滿蒙態度ニ関シ極メテ神經過敏ニシテ後藤子爵及久原特使ノ訪露ハ固ヨリ其他有ユル機會ヲ利用シテ我對滿蒙政策ヲ攻撃シ連日ノ新聞紙ハ所謂我滿蒙積極政策若ハ滿蒙侵略政策乃至ハ日露蒙ノ聯盟等荒唐無稽ノ記事ヲ掲ケ之カ為ニ目下懸案ノ滿蒙交渉ハ勿論一般張作霖關係ノ交渉ニモ鮮カラサル影響ヲ及ホシ居ルニ付テハ此際右總裁ノ渡日

ハ支那官民ニ悪用セラレ更ニ我立場ヲ不利ナラシムル虞アルニ付聊カ考慮ヲ必要トスヘク従テ我对支關係ヨリ見レハ成可ク三月七日ノ除幕式ヲ形勢ノ緩和スル迄多少ノ時日延期スルコト望マシク右ノ御含ヲ以テ一応發起人側ニ御談合アリタシサレト若シ諸般ノ都合上是非共延期シ難キ事情アルニ於テハ喀拉沁王一行ノ内地巡遊ノ地点ヲ限局シ且講演其他目立チタル催ヲ成可ク止ムルコトニ致度キニ付テハ貴見御回電有リ度シ同王ハ渡日シタキ意向ナル由内聞スルモ尚更ニ御回答ヲ待チテ直接確カムルコトト致スヘシ

尚本庄中将モ最近發起人側ヨリ同王渡日ニ付斡旋方依頼ヲ受ケタル由ナルモ唯今渡日セシムルコトカ国策上面白カラサルニ於テハ供養式ノ延期ハ致方無シト考ヘ居ル趣ナリ<sup>4</sup>

ここにあるように、本庄繁は高鍋から依頼を受けてカラチン王と接触し、訪日に荷担していたのだが、計画への危惧は芳沢をはじめとする公使館員たちと共有してもいたようである。

結局この要請を受けて、外務省は四日付で次のように北条大洋宛電信で注意を促している。

来ル三月七日博多ニ於テ挙行セラルヘキ蒙古軍供養塔除幕式ニ蒙藏院總裁喀拉沁王及喇嘛教高僧招待ノ件ニ関シ電報ヲ以テ在支那芳沢公使ニ照会致置候処今般同公使ヨリ「右招待ハ全然宗教的動機ニ出テタルモノトスルモ支那側ニ在リテハ目下我方ノ对滿蒙態度ニ関シテ極メテ神経過敏ナル折柄右總裁ノ渡日ハ支那官民ニ誤解ヲ生スル惧レモアルニ付成ル可ク三月七日ノ除幕式ヲ相当ノ時期迄延期スル方好都合ト被思料モ若シ諸般ノ都合上延期シ難キ事情アラハ喀拉沁王一行ノ内地巡遊ノ地点ヲ限局シ且講演其他目立チタル催ヲ成可ク避クルコトニ致度キ旨ノ回電ニ接シ候就テハ右

ニ関シ主催側ノ意嚮承知致度芳沢公使ヘ回電ノ都合モ有之候条至急何分ノ儀御回示相成度此段申進候敬具

追テ同公使ノ来電ニ依レハ本庄中将モ最近發起人側ヨリ同王渡日ニ付斡旋方依頼ヲ受ケタル由ナルモ唯今王ノ渡日カ国策上面白カラサルニ於テハ供養式ノ延期ハ致方無カルヘシト考ヘ居ラル、趣ニ付為念申添候<sup>5</sup>

これに対し、高鍋は除幕式の延期はできない旨次のように回答したようである。

除幕式日取ハ諸般ノ都合上延期シ難キニ付出来得ル限り貴電ノ趣旨ニ副フ様取計フベキニ因リ当日喀拉沁王其他ノ出席ヲ得度ク尚ホ本件ハ前年奉天ニテ張作霖ノ賛成ヲ得タルコトハ本庄中将モ承知セラレ居リ又昨年喀拉沁王トモ打合せ済<sup>6</sup>

結局この回答、特におそらくは張作霖が賛成しているという点を受けて、外務省本省は公使館に対して状況を確認するよう指示したうえで、延期等を勧告することはやめたものと思われる。

こうして外務省側もカラチン王来日についてはこれを容認することとなった。しかし一方、訪日に向けた北京での交渉は難航していたようである。本庄は高鍋に対し、二月一日付で次のように書き送って交渉難航の様子を伝えている。

拜啓屢次御惠翰恐縮ニ存上居候儘而種々事情有之御返事延引申訳無之候、公使館側ノ諒解モ相済ミ文化事業方面ヨリノ出費モ最早問題モ無之様子ニ御座候又御来示ノ

一、讚文ノ名前、保安総司令トアルハ中華民國大元帥ト為スコトハ張作霖ニ於テ無論何等異議ナキヲ明言致居候未レカ亦ハ勿論ノ当然ニ御座候

二、讀文代読ヲ貴大師ニ於テ致サレ度義ハ別紙大元帥秘書庁公翰ノ通りニ御座候

三、喀喇沁王貢桑諾爾布出張ノ事ノミ未タ確定セス焦慮致居候何レ兩三日中ニ明答可致候得共事情ハ略ホ左ノ通りニ有之候

イ、今里代議士先般來燕ノ砌リ喀喇沁王ノ承諾ハ得アルモ支那政府筋ノ諒解何等之オカ充分ナラサリシ様子ニ候

〔欄外〕今里代議士ヨリ貴僧宛ノ書面ニハ張作霖始メ政府側ニモ話サレタル様ナルカ作霖ノコト故喀喇沁王渡日ノコト抔

記憶ニナキ様子忘却シタルモノカ潘總理等モ初耳ノ様子誰レカ別ノ大臣ニ話サレタルモノラシク候

ロ、喀喇沁王自身ハ渡日ヲ希望致居候得共北京政府側ニテハ何トナク躊躇ノ色アリ、張作霖ニ直接談シ候処ニテハ別段可否ノ意見モ無之候得共内閣總理潘復ニ懇話候処彼ハ喀喇沁王ハ目下蒙藏院總裁ニテハ随分多忙ニ有之、離京ニ便ナラスト申居候尤モ目下張大元帥ハ蒙古王公ヲ北京ニ招致シ茶話会ヲ催セル等多少忙シキハ事実ナルモ離京シ得スト申ス程ニハ無之恐ラク日本カ支那ノ治下ニアル蒙古ニ対シ支那政府ヲ拔ニシ直接ハ蒙古ニ対シ、何等カ画策スルトデモ邪推セルモノカトモ想ハレ申候

此意味ニ於テ彼ノ日蒙騎馬大旅行ノ壯図ノ如キモ支那漢人種トシテハ如何ニ解シアルカ一寸疑問ニ御座候

右等ノ次第二テ御送惠ノ雜誌及福岡県知事并全市々長等ノ紹介状ニモ日蒙親善ノ文字ハ支那側ノ喜ハサル処ナルヤニ見受ケラレ此等ノ文字ハ日本ヨリ見レハ当然ノコトナカラ支那側当路ヨリ見レハ神經ヲ悩マス趣モ有之申候從テ此等ハ凡テ支

那ニ示スコトナク単ニ日支信交ノ意味ニテ説明致居リ申候

右様ノ次第二テ楊宇霆等モ居中斡旋致呉レ居候得共政府部内ニ反対アリ止ムヲ得サレハ他ノモノヲ派遣スヘシ抔語リ居リ茲數日ノ間ニハ何トカ確定可致候

潘復ハ班禪刺嘛コソ然ルヘシ抔語リ候得共全刺嘛ハ小生モ存居候得共氣位高ク急ノ間ニ合ヒ不申候又彼カ渡日スルトスレハ多數ノ從者ヲ連レ可申經費上不可能ナルノミナラス英國トノ國際關係ニモ考慮セサル可ラス中々面倒ニ有之申候

ハ、兎ニ角小生ハ此際人ヲ代ユルコトノ間ニ合ヒ兼ヌル次第又日本側ニテ已ニ各方面ニ喀喇沁ヲ紹介シアル關係モ有之變更至難ナル旨ヲ説明シ依然喀喇沁王ノ渡日ヲ得ル様尽力可致候得共右事情不取敢御通知致度候

二、喀喇沁王渡日予定ノ通り相運候場合ニ於テモハ当地公使館及、外務省側懸念ノ通り日本カ全王ヲ利用シテ国策ニ便セントスル、抔ノ感シヲ与ヘヌ様致度又漢人政府ニ日本カ蒙古ニ野心アリ抔ノ杞憂ヲ与ヌコト必要ニ御座候喀喇沁王モ渡日ノ際ニハ蒙藏院總裁ノ方ハ休暇ヲ願出テ全ク個人ノ資格ニ於テ渡日スル様申居候右御含ミ被下度候

〔欄外〕從テ大講演会就中日蒙親善ノ講演会等ニ引張り出サヌ方宜シカルベキカ

先ハ不取敢右事情御通知迄如此<sup>①</sup>

この書簡によれば、難航の理由はカラチン王本人ではなく北京政府内部の疑念にあった。要は「日本カ全王ヲ利用シテ国策ニ便セントスル」のではないか、ということである。日本公使館や外務省本省が懸念していたとおりの状況が北京政府内部にはあったのである。

本庄はこの書簡を認めたのち、一六日に再び「潘総理ヲ訪ヒ喀喇沁渡日ノコトヲ談ジ」ている。こうした努力の甲斐あつてか、結局一八日本庄は「午后二時半國務院ニ夏秘書長（國務院）ヲ訪ヒ、「カラチン」日本行ノコトヲ語り全意ヲ得タリ。此日夏総代理トシテ「カラチン」ニ電話ニテ請暇ノ上渡日スベク注意」しており、除幕式まで三週間を切つてようやく訪日が決めた。二三日には張作霖も訪日を裁可し、正式にカラチン王の除幕式参列が決した。<sup>⑧</sup>

おそらくこの裁可を受け、外務省文化事業部は、二月二四日付で「昭和二年度対支文化事業特別会計事業費ノ項講演及視察費ノ目ヨリ喀拉沁王ニ金壹千円喇嘛高僧ニ金五百円合計金壹千五百円ノ額ヲ視察手当トシテ支出スル」高裁案を起案、二八日付で次官決裁された。この高裁案ではカラチン王について、「往年王府ニ鳥居博士其他邦人ヲ招聘シ旗内ノ開発ニ努メ爾來日本ニ対シ常ニ好感ヲ有シ東方絵画協会等ニモ尽力勸カラサル」とし、その招聘計画は「対支文化事業トシテ有意義ナル計画」と評価している。<sup>⑨</sup> 外務省本省、特に対支文化事業部ではこの計画に対し、積極的に援助する姿勢を見せていたと言えよう。<sup>⑩</sup> さらに、三月一日付で出淵次官名で朝鮮総督府政務総監・奉天総領事代理・内務次官に宛てて、カラチン王一行に対し道中および内地での便宜を図るよう依頼・指示している。<sup>⑪</sup> このように外務省側では、出先も含めてカラチン王の来日を前提とした対応をとっていたのである。

## 二 カラチン王来日中止と除幕式の挙行

カラチン王を主賓とした除幕式は、外務省よりの注意を受けたもののその後援も受けて、予定通り挙行されることとなった。ところが結

局、肝心のカラチン王は来日しなかったのである。

高鍋日統は三月二日に北京の北条大洋からの電信でカラチン王の来日中止を知らされた。高鍋は、発起人の一人である新野正観と「二人の坊主頭をつきつけて相談したが何とも仕やうがない。予は之の電報をいだいて熱い涙がポロ／＼と流れ」る状態で悔しがったが、結局直前まで一般にはカラチン王来日中止を公表しなかったようである。このため新聞（『九州日報』『福岡日日新聞』）では除幕式当日朝刊で初めて来日中止を報じるという状況であった。

一方外務省では、高鍋らと同じ三月二日に、在北京公使館からの来电でこの件をつかんでいた。この来电には、「喀拉沁王ハ病氣ト称シテ」いるが、「手續繁複其他北京政府側ノ反対アリタル関係モアリ或ハ怖氣付キシ為ナルヤニ見受ケラル」とあり、<sup>⑫</sup> 実際にはカラチン王側の政治的な考慮により来日中止に至ったと推測されている。

カラチン王来日中止の真相はどこにあるのだろうか。八日付『福岡日日新聞』朝刊は「支那消息通の某氏」の談話として次のように報じている。

日本に対するカラチン王の感情は極めて良く予て日蒙親善を口に  
し日本に渡来して朝野の名士と語りたいたと云つて居た事があるか  
ら中止の理由として病氣は口実にすぎぬ勿論来朝が嫌になつたの  
ではないその裏面には支那式の他愛もない事が蟠つて居るそれは  
カラチン王が平素日本と好意を持つて居るのを快らず思つて居る  
大元帥張作霖はカラチン王の渡日は何等かの政治的意味が含まれ  
て居るものと邪推し疑心暗鬼を生じたものと云はれて居たのが事  
実らしいから北京出發に際して張作霖氏の一睨みに会つたので思  
ひ切つて出發も出來ず遂に病氣を起こしたのであらうと

高鍋は来日中止に関して次のように言っている。高鍋は除幕式のち七月に北京を訪問した際「北京雍和宮の管長」から「この三月博多に於ける蒙古軍供養塔落成除幕式の際はカラチン王も非常によるこんで渡日せらるゝ都合であつた所、国際的の事情で中止する事に成つたのは貴下等に対して実に何んとも申上げやうもない事でした」と言われたという。また、カラチン王の「病氣」については「張作霖等の漢人と蒙古人との民族的、また政治的關係の微妙であり複雑である」ことから来る「国際的珍病」と評している<sup>14</sup>。

このように高鍋も中国側の国際関係に対する考慮や国内事情が要因であると見ているが、一方で駐華公使・芳沢謙吉が横槍を入れたとも見ていたようである。高鍋はアルバムに貼付した芳沢の写真の側に「謙吉ハ本庄将軍ト日統トヲ裏切り国民外交ヲ妨害セリ」と書き込んでいる。この短い書き込みから推測すれば、少なくとも中止が決まるまでは高鍋は、芳沢がカラチン王来日に便宜を図っていると見ていたが、直前になって芳沢が自分たちを「裏切」って何らかの「妨害」を行つた結果、来日が中止となつたと考えたのであろう。

一方、訪日を中止した直後に実際にカラチン王に面会した本庄繁は、本人の様子を見て実際に病氣のようであると日記に記している<sup>15</sup>。単に顔色を見て言っているだけのことであるから確かなことではないが、実際に相当な心労がたまっているように見受けられたのであろう。ただし、後日カラチン王は本庄に、「渡日中止ハ張作霖ノ意図ナリト漏」<sup>16</sup>らしており、直接張作霖がカラチン王に対して指示したということではないようであるが、訪日中止が張作霖の意向に基づくものである可能性は高い。

以上のことから推測すれば、カラチン王は訪日をめぐって北京政府

内部でかなり強く疑惑の目を向けられており、張作霖もまた最終的にはこれを問題視したのは確かであろう。あるいはそうしたところからカラチン王は心労がたまつたため体調を崩し、「病氣」という名目で訪日を中止にしたといったところが実際のところではなからうか。はたしてそこに芳沢謙吉らが関与していたかどうかはわからないが、中止の要因が単なる健康問題ではなく、張作霖の政治的な考慮あるいは圧力が最大の要因であつたことは間違いあるまい。

上記のように、各史料中でカラチン王来日中止の主要な要因と推測されているのが、張作霖による政治的圧力である。張作霖は満洲の馬賊の出身で、一九一九年に満洲全体の支配者となり、さらに翌二〇年には中国中央政界入りを果たした。しかしその年の第一次奉直戦争に敗れ、いったん満洲に退いた。再起を期した張作霖は日本の援助を受け満洲の経営に専念、実力を涵養し二四年の第二次奉直戦争に勝利、北京政府を掌握した。二六年一二月には安国軍総司令に、翌年六月には北京軍政府を組織して大元帥に就任し、中国・北京政府の最高実力者となつていた。

前述のとおり張作霖は蒙古軍供養塔建立の賛成人に名を連ねていただけでなく、供養塔に讃文まで寄せている<sup>19</sup>。さらに高鍋によれば、一九二五年に会見した際、張作霖との間で次のようなやりとりがあつたという。

愈々供養塔が落成したならば張氏は勿論蒙古人種を代表する大官も参列せらるべく何分の御配慮を依頼したる所、張氏は

『自分は非常に多忙であるから確に御約束は出来ぬが、蒙古、カラチン王の如きは適任者と信ずるから渡日するやう心配致しませう』

と心から同情された。<sup>20)</sup>

高鍋としては、張作霖の全面的な支持を取り付けることができたことを認識していたのであろう。しかし、張作霖が本当にこのとおりに行ったのかは留保せねばならないかもしれないし、本庄の書簡にもあったように、三年も前のことを張作霖が覚えていた可能性は低いであろう。

それでは、大方の推測のとおりであるとすれば、なぜ張作霖はカラチン王の訪日を「妨害」したのであろうか。

この理由をはっきり示すものはもちろんないが、当時の張作霖の対日態度や中国国内情勢を考慮すれば、この対応は必ずしも不自然とは言えないことがわかる。

まず張作霖の対日態度について見てみよう。<sup>21)</sup> 張作霖は日本の援助を受けて自らの権力を維持・拡張しつつも、一方で日本に対して完全に従属していたわけではなく、むしろ反日・抗日的政策をしばしば実行したことは周知のとおりである。例えば一九二五年以降満洲において、日本に対抗するかたちで自国鉄道網の建設を進めていった。これについては二七年一〇月、満鉄社長山本条太郎と張作霖の間に「山本・張協約」が結ばれて、日中間にひとつの合意ができたが、鉄道問題が完全に解決したわけではなかった。また、「南満洲及東部内蒙古に関する条約」で認められていた日本人の土地商租権を否認する命令等をしればば発令した。さらに張作霖治下の満洲では排日運動も頻発した。このように張作霖は日本の援助を受けながら反日的な態度をしばしば示した。それは蒙古軍供養塔除幕式の直後には、外務省亜細亞局第一課を「〔張作霖の〕日本ニ対スル態度其他殆ト傍若無人ノ觀有ルハ誠ニ言語道断ト云ハサルヘカラス」と怒らせるような状態であった。<sup>22)</sup>

次に中国の国内情勢について見てみると、蒋介石復職後の一九二八

年二月六日、国民党が北伐再開を決議、さらに国民革命軍の再編が行われ、北伐の準備が整えられつつあった。張作霖としては南北妥協を図りたい考えであったが、蒋介石がこれに応じず北伐を実行しようとしている以上、それを迎え撃たねばならない状況となった。<sup>23)</sup>

カラチン王は辛亥革命の際に起きた第一次満蒙独立運動で、肅親王や川島浪速に呼応してこれに参加し、挙兵した過去があった。張作霖としては、そうした過去に照らして、カラチン王が訪日を機会に再び日本と結んで内蒙古の独立を図ろうとするのではないかという疑念に駆られたかもしれない。国民革命軍が北伐の再開を宣言する中で、もし後背地たる内蒙古が自分の支配を脱すれば、そして万一にもカラチン王が蒋介石と手を握れば、あるいはそこまで行かなくとも内蒙古で反乱が起きるだけでも、自分の地位は極めて危うくなる。張作霖の「疑心暗鬼」とはそのようなものであったかもしれない。

もちろん推測の域を出ないが、以上の状況から考えれば、いったん裁可しておきながら最終的には圧力をかけて訪日を中止させる可能性は十分にあったと言える。張作霖としては当初、蒙古軍供養塔に自らが讃文を送ることやカラチン王が除幕式に参列することは、問題を惹起するようなものではないと考えていたのである。カラチン王の訪日には外務省が関与しているだけに、中止すれば日本との関係悪化の可能性も考慮されたはずであるが、「疑心暗鬼」がそれを上回ってしまったのかもしれない。

こうしてカラチン王の来日は中止となったが、ラマ教高僧バトモンホは予定どおり来日し、いわばカラチン王の代わりとして、肅親王第四王女廉鋁（川島廉子<sup>24)</sup>の姪）、第二次満蒙独立運動の指導者パプチャブの子息ジョンジュリジャク（韓紹宏）・カンジリジャク

（川島芳子の夫）が除幕式に参列した。満蒙独立運動の直接当事者ではないとはいえ、その関係者の子女が参列するというのはそれもまた疑惑を招きそうであるが、例えばジョンジュリジャクは当時日本の陸軍士官学校在学中であったため、さほど目立たなかったであろう。

以上のモンゴル関係者のほか、日蓮宗門からは管長・酒井日慎が直々に参列して蒙古軍供養塔除幕式は執り行われた。関連行事を含めた日程は以下のとおりである。

五日～一〇日 蒙古展覧会 於福岡県商品陳列所

開催中には以下のとおり「満蒙関係大講演会」を開催

五日 高鍋日統「蒙古襲来護国の大マンガラ」

武谷水城「北条時宗と供養塔（上）」

六日 中屋中佐「日蒙大騎馬旅行に就て」

高鍋日統「六百年前入蒙の英雄僧日持上人論」

人論

武谷水城「北条時宗と供養塔（下）」

七日 井田保雄「蒙古事情」

八日 井田保雄「満洲事情」

九日 高鍋日統「蒙古と喇嘛教」

新野正観「蒙古軍大供養塔建立由来」

十日 白坂栄彦「蒙古軍供養塔の建立所感」

山田良雄「蒙古襲来と日蓮聖人の態度」

六日 満蒙活動大写真会 於福岡県第一公会堂

七日 蒙古軍大供養等落成除幕式

日蓮宗管長御親教 於勝立寺

東亜親善大講演会（八日） 於勝立寺

出演者 酒井日慎 島田勝存 斎藤守圀 時実秋穂

白水淡 北条太洋 バトモンホ 韓紹宏

新野正観 高鍋日統 山田良雄

八日 元寇役・日清役・万霊供養大法要 於元寇記念館

九日 東亜親善大懇親会 於博多商工会議所

このほか、前掲の日蓮宗宗務院よりの援助要請文書によれば、さらに日本各地で講演会・懇親会等が計画されていたはずであるが、これらを実施されたかどうかはわからない。ともかくも、供養塔の地元・福岡では、以上のような大々的なイベントが挙行されたのである。

除幕式当日の様相を新聞報道から見とおこう。

博多湾外の一孤島志賀ノ島首切の岳巒に建設された蒙古軍供養塔の除幕式はうららかな陽光に恵まれてきのふ午前十一時半から盛大に執行された

此の日志賀島では消防組、在郷軍人、青年団、処女会員等二百二十余名の人々が早朝から出勤して式場から荒波寄する首切海岸一帯を清め、その附近に天幕張りの大宴会場、休憩所、湯茶接待所等を設けて一行の到着を待った。一般参列者は午前八時前後から一団又一団と続々博多築港を出発、午前十時の玄海丸では斎藤福岡県知事始め古川旅团长、守田少将、時実福岡市長、酒井日慎大僧正、肅親王家の第三皇女川島れん子嬢外日蓮宗各寺の住職五十余名が三発の打揚げ花火を合図に築港を出発してまつしぐらに式場に向ひ午前十一時首切着

道の両側に黒山の如くに集まつた多くの人々に迎へられて一行は一路式場に向つた。かくて午前十一時三十分勇ましく冲天に爆裂



した花火を合図に式典を開始、日蓮宗管長の開始の辞があつて法要に移り壮厳な読経裡に管長は静かに起つて供養塔の除幕を行ひ次いで知事、旅团长、管長外参列者十余名の祭文朗読焼香があり工事報告を最後に式を了へ、一行は首切塚麓の大宴会場に移つて祝宴を開き和氣藹々裡に午後三時散会した<sup>23)</sup>。

カラチン王が参列していればあるいは除幕役は彼であつたかもしれない。ともかくもこの記事上では日本側参列者の名ばかりが挙がり、一方の主役であるはずのラマ教高僧バトモンホラ中国側参列者の名は見えず、すっかり影が薄くなつてしまつていようにも見える。こうして蒙古軍供養塔除幕式は、本来の主役を欠いたまま執り行われたのである。

### おわりに

蒙古軍供養塔除幕式および関連の諸行事は大々的に執り行われ、一応の成功を収めたようである。しかし、大々的に宣伝されていたにもかかわらずカラチン王の来日が中止になつたことは、高鍋日統らにとっては大きな挫折と感じられたことであろう。

高鍋の蒙古軍供養塔建立がようやく報われることとなつたのは、除幕式から一〇年を経た一九三八年のことであつた。蒙古連盟自治政府の主席・徳王(テムチュクドロプ)が供養塔に参詣したのである。日本の傀儡政権である同政府であるから、内蒙古の最高指導者の参詣には何の障害もなかつた。参詣に関する徳王の感想も感激に満ちたものであつたが、高鍋にとつても感激もひとしおであつたらう。そしてこの翌年高鍋は、宗門より蒙古開教監督・開教地布教師に任ぜられ、

大陸に雄飛していったのである。<sup>23)</sup>

### 註

- (1) 拙稿「高鍋日統と大陸山水城院」(太宰府市史編集委員会編『古都太宰府』の展開 太宰府市史通史編別編)二〇〇四年、太宰府市)。
- (2) 以上、『中国人名資料事典』第五卷(一九九九年、日本図書センター、底本は外務省情報部『改訂現代支那人名鑑』一九二八年、東亜同文会調査編集部)六八八〜六八九頁等による。
- (3) JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:B05015741200(一八六画像目)日蓮宗務院発外務大臣田中義一宛文書(満支人本邦視察干係雑件 補助実施関係)第二巻、外務省外交史料館所蔵H1.6042、以下「外務省史料」と略)
- (4) 芳沢公使発田中外交大臣宛第一四一号電信写(前掲外務省史料、一九一画像目)。
- (5) 岡部文化事業部長発北条太洋宛半公信「蒙藏院総裁喀拉沁王来邦ノ件」(前掲外務省史料、一九三〜一九五画像目)。なおこの電信は、追つて書きの部分を除き『興亜の光 蒙古軍大供養塔建立由来』(一九三九年、蒙古軍大供養塔東京事務所)、一一二頁にも掲載されている。
- (6) 二月七日付田中大臣発芳沢公使宛電送第七九五号「蒙藏院総裁喀拉沁王来邦ノ件」(前掲外務省史料、一八九画像目)。
- (7) この書簡は前掲『興亜の光』、一〇一〜一一五頁に写真版で掲載されている。なお、二重線は抹消、△/▽は挿入を示す。傍点は引用者による。
- (8) 以上、『本庄繁日記』一(一九八二年、山川出版社)、二二八〜二三〇頁。
- (9) 以上、「蒙藏院総裁喀拉沁王一行へ視察費補給二関スル高裁案」(前掲外務省史料、一八五画像目)。
- (10) なお、この件については決裁と同時に在北京公使館にも伝えられている(田中大臣発芳沢公使宛電送第二二六七号「蒙藏院総裁喀拉沁王来邦ノ件」、前掲外務省史料、一九七画像目)。
- (11) 電送第二二四一・二二四二号(前掲外務省史料、二二〇〜二二一画像目)、

機密第一五七号（同、二二三～二二四画像目）。

- (12) 前掲『興亜の光』、一一九～一三〇頁。
- (13) 芳沢公使発田中外務大臣宛第二六六号（前掲外務省史料、二一九画像目）。
- (14) 前掲『興亜の光』、一三二～一三三頁。
- (15) 高原日美子氏所蔵。
- (16) 前掲『本庄繁日記』一、二三三頁。
- (17) 同前、二三四頁。
- (18) 訪日中止の報を受けた本庄は「公使館ノ原田ト共ニ王ヲ訪ヒ更ニ渡日ヲ勸メ」ており（同前、二三二頁）、少なくとも訪日を中止させることが日本公使館全体のコンセンサスとなっていたとは考えにくい。
- (19) ただし実際の撰文は于冲漢による（前掲『興亜の光』、一二七頁）。また、この讀文が高鍋の許に届いたのは除幕式のおよそ三年前、一九二五年のことである。
- (20) 同前。傍点は引用者による。
- (21) 以下の日中間の諸懸案をめぐる張作霖の対日態度については、水野明『東北軍閥政権の研究—張作霖・張学良の対外抵抗と対内統一の軌跡—』（一九九四年、国書刊行会）を参照。
- (22) 「奉天派ノ対日態度並ニ関稅増徴問題ニ対スル対策トシテノ南北和平提議」〔JACAR RefB02030036000（三五九画像目）、『滿蒙問題ニ関スル交渉一件』松本記録第二卷、外務省外交史料館所蔵松A11.01〕。作成部局の推定は馬場明『日露戦争後の満州問題』（二〇〇三年、原書房）、一八〇頁による。
- (23) 水野明前掲『東北軍閥政権の研究』、二二一～二二三頁。
- (24) 川島芳子は、肅親王善耆の第一四王女として生まれ、川島浪速の養女となった人物。
- (25) 『福岡日日新聞』一九二八年三月七日付朝刊による。
- (26) 前掲『興亜の光』、一一八～一二二頁。
- (27) 『九州日報』一九二八年三月八日付朝刊。
- (28) 徳王の参詣および内蒙古での高鍋の活動について詳しくは、前掲拙稿「高鍋日統と大陸山水城院」三三〇～三三二頁を参照されたい。

（ふじおか・けんたろう 九州大学専門研究員）